

# 世界に発信する アーティストたち

No.10

## 鴻崎 正武

Masatake KOUZAKI

現代の宗教画を想わせる特異の作品を制作する鴻崎正武。自ら「東北画」とも呼称するその作品は、海外展での評価が高い。



鴻崎正武は2000年「UBS Art Award 2000/Finalist Japan」。そして04年には「第13回青木繁記念大賞展」大賞を受賞し、それ以後、海外での作品発表も含め徐々にその活動範囲を広げている。16世紀のオランダの画家ヒロニムス・ボッスに強い影響を受けた画家は、「TOUGEN」をテーマに、独特な宗教的世界を想わせる作品を発表している。そこからは国境、文化を越えて理解されるメッセージが広く世界へ発信されている。

——昨年の3月にニューヨークで最初の個展を行ったそうですが、反応はどうでしたか。

鴻崎 なかなか盛況でした。それまでも、チェルシーのディロンギャラリーでは、グループ展などに毎年出していましたし、アートフェアにも出してもらっていましたから、交流はずっとありました。個展は初めてでしたが作品はすでに出品して知られていたということもありますね。

——作品はどんなように評価されているのですか。

鴻崎 僕の作品自体、金屏風のな感じがあって、しかもいろんな動物植物が掛け合わさって中世

の頃からモチーフとされているヒロニムス・ボッスのような宗教画のひとコマに描かれているような奇怪な生物が描いてあったり、ギリシャ神話にでてくるようなモチーフとか、東洋的なモチーフが和洋折衷で描かれていたりするという、そのミックス感が面白いねと言われたりします。

——奇怪な生物もそうですけど、人工衛星がでてきたり新しい要素も入った現代の宗教画のようでもありますね。

鴻崎 そのモチーフすべては、それは人間が祈りや夢を託すようなものだったり、そういうものが掛け合わされて、その人工



TOUGEN NO.86

## 日本的なイメージは アーティスト自身が作っている

衛星も何か植物みたいなものだったり、何かひとつの生きもののように見えていたりとか、植物自体も、再構成していくとか、人間自體も、何か掛け合わせられていくと逆に植物っぽいものに変化していくとか…

——そういう独特なイメージの世界が展開されていますが、そ

れはヒロニムス・ボッスの影響というのが相当大きな部分を占めていますか。

鴻崎 大きいですね。僕の中では現代美術として通用するくらい、そこで完成されている絵の世界観だと思います。ある意味オマージュと言うか、それをリニューアルするというのは、素材的なものだったり、コンピュー



TOUGEN NO.84

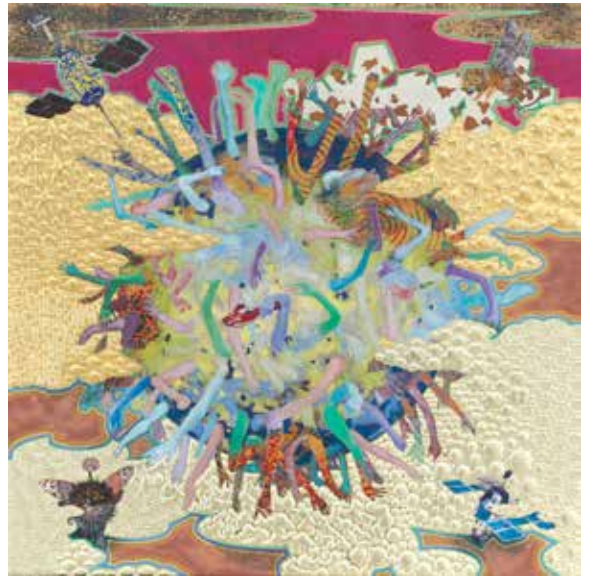
ターでの手法だったり、少し変化を加えていくと現代的にアレンジできるものだと思います。

——ボッスと出会ったのはいつ頃ですか。

鴻崎 大学時代ですね。大学の2年くらいかな。実物はまだ見ていませんが、本物を見ないでもあの画集で見たインパクトが

相当強かったですね。そういうパノラマ的な作品は洛中洛外図だったり圧倒される絵は日本にもあると思いますけど、それ以上に何か人間がグチャグチャに掛け合わされているイメージと言うか、人間が植物に見えて、動物が人間みたく見えたり、塔が宇宙船みたくに見える。何かそこで未来も過去も完成されている。それまでは新しいアートは、絵の空間性や色彩に対して凄くことな

くてはいけないというイメージがあったんですけど、ボッスを知った後は、描いて表現できることだと思いましたね。その方法論を自分なりに続けていけばできるなど。それまでインスタレーションや抽象画をいっぱい創っていましたが、それからあまりブレてないですね。いわば



TOUGEN NO.88

**略歴**

- 1958年 東京都生まれ。
- 1972年 福島県に生まれる
- 1994年 多摩美術大学油絵科入学
- 1995年 東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻入学
- 1999年 東京芸術大学卒業、大橋賞受賞、学校賞受賞
- 2000年 USB Art Award 2000 (ロンドン)、財団法人守谷育英会守谷賞受賞
- 2001年 α展 (三越日本橋本店)
- 2004年 第13回青木繁記念大賞公募展にて大賞受賞
- 2005年 東京芸術大学大学院博士課程修了、「New Spirits 福島 - 物語をめぐって -」  
鴻崎正武・高橋克之・小林浩展」(福島県立美術館)
- 2011年 蔦屋書店2号館2階カフェステージ「TOUGEN No.48」展示
- 現在 東北芸術工科大学 准教授

■ 4月11日→5月13日  
TOUGEN ⇄ Shangri-ia? 「鴻崎 正武展」  
軽井沢ニューアートミュージアム 1階ギャラリー

— その画材は、洋画、日本画という拘りなく使うということですね。

鴻崎 そうですね。金箔とか岩絵具にしても、こう使わなくちゃいけないという方法論に対して、僕の中では拘りなく自由に使っているんです。こんなの邪道だよといわれたらそれまでですけど。それこそラメ使ったりとか、アクリルも研ぎ出してみたいな工芸的な津軽塗的な手法も使ったりいろいろやっています。

— ありとあらゆる素材を使っ

て世界をつくっていく…。

鴻崎 そうですね。かといって、あまりにも現代的なものだけじゃなくて、伝統的な日本古来の箔だったり、そういうものも使いたいなど。

— 作品の堅牢さというものも考えての上ですか。

鴻崎 そこは注意したいところですね。やっぱり日本画の膠を使っていると、海外に持っていくと結構ダメージが大きかったりとか、海外展で痛い経験したので、そこはちょっと改善し

— その平面作品の制作には、

いろいろな素材を駆使していますよね。コンピューターも重要な位置にありますか。

鴻崎 まずは最初にコンピューターで作って込んでという感じでスタートします。ものの輪郭の正確性を引き出していききたいと

思うので、形としていつもストックしておきます。その一個一個の物体から再構成していく感じですね。下絵としてコンピューターで作って込んでいく形ですが、

そこはもうパッチワーク的いろいろなものを掛け合わせて構成していきます。その上から金箔だったりとか、岩絵具だったり

— 洋画、日本画に拘らないということですが、鴻崎さんのおっしゃっている「東北画」ということはそういうところと関係しているんですか。

鴻崎 洋画という定義自体も明治維新からで、洋画、日本画というものの枠を取っ払ったところで「東北画」というものの定

義を作ってみようという、ある程度実験的なものですね。僕の中には日本画、洋画と言う線引きはなく、東北画といっているのも、日本画、洋画というのをちょっと疑ってみるための装置でもあるわけです。最初はそこまでの意識はなかったんですけど、真正面から東北画ってなんだろうとやっただけですけど考え

ながら、東北って何だろうなと考えるながら、何か東北のイメージ

— そのための取材もなさっているそうですね。

鴻崎 山形の東北芸術工科大学(准教授)に行くようになったのは福島出身というのが強いと思うんですけど、山形でいろんな霊場というか、恐山だったり山寺だったりとか、東北を旅しながら、東北って何だろうなと

— 洋画、日本画に拘らないということですが、鴻崎さんのおっしゃっている「東北画」ということはそういうところと関係しているんですか。

— 洋画、日本画に拘らないということですが、鴻崎さんのおっしゃっている「東北画」ということはそういうところと関係しているんですか。



TOUGEN NO.85



TOUGEN NO.87

## ゲストキュレーター伊東順二による 「わたし超スキッ!! 草間彌生 —世界を感動させた自己愛—」 がスタート



東京に上京するまでの初期の時代、ニューヨーク時代、そして日本帰国からベネチアビエンナーレで脚光を浴びるまでの不遇の時代、そして世界的アーティストとして脚光を浴びた時代の4つで構成されている。作品も、美術館で見られる大作の他、珍しい作品なども集められている。同展は前期（6月30日まで）と後期（7月5日～9月23日）に分けられ展示替えがされる。

■「わたし超スキッ!! 草間彌生 —世界を感動させた自己愛—」  
4月11日～9月23日  
軽井沢ニューアートミュージアム



4月10日、翌日からの一般公開を控え特別内覧会とオープニング・セレモニーが開催された。今回、ゲストキュレーターとして同展を企画した伊東順二を始め、共催の信濃毎日新聞、上毛新聞、NBS長野放送など地元のマスコミ等の関係者も集まり、賑やかに、新しい切り口の草間彌生展がスタートした。展覧会は4部構成で行われ、草間が



TOUGEN NO.75

再構成していくんですけれど、出てくるモチーフもコケシだったりとか、東北のモチーフを積極的に取り入れようとしています。山形に住むようになってそうやってきたんですけれど。

——その活動も、以前から作品のテーマとなつている「TOUGEN」とはかけ離れない活動だと言えますね。

鴻崎 「TOUGEN」は中国の桃源郷からきているんですけど、西洋というシャングリラ、かといってユートピアでもない。理想の社会ではなく何か超越した世界というか、彼岸の

先のイメージだとか、桃源郷は理想社会の実現じゃなくて実現を諦めるといふ思想もあるらしいんですけど、何かそういう人間が悟りを開いた先にしか見えないような幻想世界みたいなものなんでしょう。そうして考えると、霊場もひとつのアミューズメントパークになつていて、何か、すこしおどろおどろしいんですけど、自分の絵もある意味、メリーゴーランドのような遊園地的なものとして描いているところがあったりするので、何か、曼陀羅とも言いづらいいんですけど、その中で完結される世界ではありません。

——「東北画」「TOUGEN」というテーマ性と、インパクトの強い表現で、これからも世界中に作品を発表していこうということですね。

鴻崎 活躍の場は日本に拘つていない訳ではないんですけども、まあ、最後は画廊にどう扱ってもらえるかということになるんですけどね。世界に持つて行っ

た時に僕の絵の評価はどうかというところ、どうやら、何か面白く映るといふことが嬉しいですね。日本という国は世界から見るとひとつの国に過ぎないというか、アジアをひっくり返してのイメージとして日本がみられているところがあると思うので、これから日本のイメージというのをどんどん新しく発信していけると思います。海外に持つて行つた時に、草間彌生さんもそうですけど、日本的なイメージはアーティストがどんどん作っていくわけですね。伝統も踏襲していく必要もあると思いますが、それ以上に、今、リアルに生きていく感覚、感性というのが、日本に在るからこそ培えると思うし、そういうものとアートの醍醐味を上手く使うことで、世界に発信していけると思います。内と外のバランスをうまく計れる自信はないんですけど、どんどん出していききたいなというところはあります。

——これからの活躍を期待しています。

「私の故郷の堺市は、刃物の歴史のある町で、子供の頃から親しみのある世界でしたから最初から違和感はなかったですね」

軽井沢ニューアートミュージアムのギャラリーで作品を発表していた立体作家・浅香弘能はこう話す。以前は抽象表現の石の彫刻を発表していた。それがいつか実現してみたいと思っていたモチーフ、具象的な日本刀を石の彫刻で制作するという作品を制作するようになった。日本刀だけではなく手裏剣までも創っている。「日本人の持つ高い精神性、清らかな心を表現し、たくなつて制作するようになりました」

という浅香は、石を切り出して、磨き上げ、武人の精神性と通じる心を鍛錬するかのよう制作に打ち込んだ。繊細な研ぎ澄まされた日本刀の表情が、黒御影石で再現されているが、これは、独特な世界を感じさせる立体作品だ。



## 浅香弘能の立体作品 御影石で生まれる 「日本刀」

■4月11日→5月6日  
石の刀-KABUKIMON- 浅香弘能展  
軽井沢ニューアートミュージアム  
1階ギャラリー